

高校野球坊主考

昨年、部員の1人が突然「片倉野球部は坊主じゃないといけないんですか」と聞いてきた。正直、この問題は指導者になる前からずっと悩み考えてきたことであり、このことをめぐって過去のやりとりが急に思い出された。

片倉でのここ十数年は、特にこの問題が表に出ることはなかったが、いつも頭の隅で引っかかっていた。しばらく言葉が出なかったが、数日後ミーティングで私の考えを話すこととした。

以下はこの時話した内容である。

私の高校時代は、本気で野球やっているような学校は私立、都立を問わず、当然のように野球部は坊主というルールのようなものがあつた。逆にそれほどでもないチームが坊主にするというのは、なんとなく気恥ずかしいような気持ちがあつたように思う。それでも夏の大会の前には、皆で坊主またはスポーツ刈りにして、それなりの体裁を整えた。自分の高校もそんな感じだつた。

その後、マスコミなどで「高校野球=坊主頭というのはいかがなものか」といった論争が起こつた。当時の管理教育批判の観点から「坊主頭の強制は選手の人権、個性を奪うもので許されるべきでない」とか、「軍隊を連想させる」「軍国主義、ファシズムにつながる」などと言われた。また、当時制服が詰襟からブレザー、ネクタイに変わっている学校が多く、「この服装には坊主は合わない」とか「プレーをするのに頭髪は関係ない。長髪でプレーしているプロ野球、大リーグの選手もいるじゃないか」とかの意見があつた。ある意味、正論のようにも思つた。

これに対し「坊主頭は高校野球らしさの象徴」「爽やかな坊主頭で必死に頑張る姿が周囲に感動を与える」「本気で野球やりたければ、頭髪なんか気になるはずはない」「長髪で帽子をかぶると、髪のを気にしてプレーに影響する」「チームとしての統一性=一体感の象徴」「夏など頭から水をかぶるのに便利」「バリカンで、自分で刈れば床屋に行かなくて良いので経済的」「清潔」などといった坊主擁護論もあつた。

「管理教育」を批判する立場をとる朝日新聞が坊主=ファッショ的な高校野球甲子園の主催をしているのは矛盾しているという意見もあつた。

そもそも、坊主頭は僧侶や軍人の他、罰を犯した人に強制されるヘアスタイルであつた。今日でも相手への謝罪を示すために頭を丸めることもある。学校でも過去には、いわゆる問題行動した生徒に対して教員から、坊主にして反省の気持ちを示すことが求められたりもした。そうすると、野球部員はいつも悪いことをして反省している奴らの集団と言うことになる。当時、世の中は男性でも長髪ブームで、いわゆる「おしやれ」男性が増えてきた時代である。また、学校でも長髪なびかせて(?)プレーするサ

ツッカーと坊主頭の高校野球、プレーの上でも自分で考えることが求められる自由なツッカーと、監督のサイン通りに動くことが求められる管理的な野球という対比で語られた。

そんな中でも多くの高校野球部で坊主頭が残ったのは、周囲から「高校野球はやっぱり坊主じゃなきゃ」という期待に応えなければという気持ちがあったのではと思う。

さらに、本来、坊主にすることは「おしゃれしたい」「女の子にモテたい」という煩惱を捨てて、野球道を追求していくという覚悟の表現といえる。ここには、ある種の誇り、プライド、美学のようなものがある。坊主にしてまで野球に打ち込んでいる自分を肯定的に捉えるマゾヒズム的な感情もあったかもしれない。しかし、そんな理屈よりも多くの選手は大好きな高校野球をするには坊主にする必要があるなら、高校3年間は髪を伸ばすのを我慢しようという諦めの気持ちから坊主だったような気がする。

そんな中、坊主にすると皆が同じだから、その中でも自分を主張(おしゃれ、ちょい悪、不良タイルの追求?)しようとして、眉毛を細くしたり、剃り込みを入れたりする者も出る。これは連盟からも禁止され、こういった者は学校代表する選手としてふさわしくないと断言されている。まあ、大人から見れば、どう見てもみっともないように思えるが、流行ばかりは説明できない。最近はどうした選手はあまり見なくなった。なんとなくホッとする。

これまで語ってきたような経緯においても、ここしばらく、坊主であることにあまり不満が出なかったのには、煩惱を捨てなくとも坊主でも女の子にモテる。いや、坊主だからこそモテるような状況に変わってきていることがあるような気がする。

しかし、それでも近年、坊主をやめる学校が増えてきている。甲子園出場経験のあるような私立強豪校でも次々にやめてきている。野球に対する考え方もかつての根性一辺倒から、スポーツとしての合理性が求められるようになった。つまり野球がスマートになったことも原因の一つだろう。学校全体のイメージに野球部の坊主がそぐわなくなってきたことで、学校からの要請もあるかもしれない。また自主性、個性の尊重、自分で考える力を身に付けるためだとも聞く。髪型一つで自主性・個性が身に付くのかという気がするが…。坊主をやめたといっても、多くの選手の髪型はほぼ同じ、いわゆる「スポーツマンらしい爽やかな短髪」、おそらくチームとしての基準が示されているのだろう。この髪型を維持させるのは案外大変な気もするが…。

また、「大会で勝ち上がれば、そのご褒美に坊主をやめてやる」とかで選手を発奮させる条件となっていることもあると聞く。また、坊主をやめて大会で負けると「そんな軟弱なことをするから負けるんだ」と周囲からの批難もある。だから、「坊主をやめたから負けた」と言わせないように、頑張って結果を残せなんていうのもあるらしい。これってどうなんだという気がするが…。一方で、部員不足に悩んでいる都立高校などで、「坊主が嫌だから野球部には入らない」という生徒を野球部に入れるために坊主

をやめたという学校もある。それはよく分かるし、納得である。頭髪程度のことで野球をやりたいのに部に入らないといのはもったいないという考え、逆に本当に高校野球がやりたければ坊主など気にならない(我慢できる)はずという、昔ながらの考えがある。

ともあれ、少子化に伴い、またサッカーなどの高校スポーツの多様化によって、以前のように野球だけが特別の時代ではなくなったことは事実である。坊主の野球部員だけが学校生活の中で目立つのは、どうかとも思う。おそらく今の風潮は続き、坊主をやめる学校も今後ますます増えていけだろ。それでも、坊主頭に象徴される高校野球をやっている者としての「誇り」、「プライド」、「覚悟」も捨てがたい。これが人を成長させる側面はあるはずだ。また、このタイミングで坊主をやめるのは、何か時代の流れに迎合するような気がして、どうも踏み出せない。また坊主をやめたらやめたで、選手の髪形に「それはふさわしくない」とか「みっともない」「スポーツマンらしくない」とか判断して「指導」しなければならないのなら面倒くさい。何でも良いと思えばいいのだが、なかなかそうはなれそうもない。

正直どうすることが正しいのか、今の自分には判断できない。だから片倉では現状の坊主を続ける。卑怯なことだが、この問題を考えないで高校野球の指導ができるならばそうしたい。結論は将来の指導者に委ねたいというのが正直なところだ(歯切れが悪くて申し訳ない)。